

amp; Raven

---

## 第1部 エンチャント・ランドの危機

HELLOWEEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Wolf & Raven  
第1部 エンチャントッド・ランドの危機

### 【Nコード】

N9452A

### 【作者名】

HELLOWEEN

### 【あらすじ】

ある国の王子様の壮大な冒険ファンタジー

## プロローグ

このお話はある1人の少年の心温まるお話です。

まず初めにこの物語の舞台となる、ある国の紹介をしましょう。  
国の名は、シンフォニー・オブ・エンチャンテッド・ランドと言いい、この世界ではあまり大きくない国です。しかし、その国の者達は活気に溢れ、“苦”という言葉忘れさせてくれるような温かいとてもすばらしい国です。

その国にはロスト・ヘヴンとう名のお城があり、そのお城の禁にはパンドラ・ゲイトと呼ばれる城下町があります。

その城下町には屋台が並び、広場では子供達が走り回り、いつも陽気な音楽が流れています。

と、そこへ

「こらー、またかあ！」

と叫び声まではいかない声で走ってくる大きな男とその前をすばしっこく走る少年。その少年は

「やーい、追い付けるもんなら追い付いてみる！」

と大男に挑発しています。この少年が後々この国を救う事になるなんて誰も思っていなかったでしょう。

おっと、話がズレてしまいましたね。話を戻しましょう。

その少年が大男をからかっていると“ゴッソッ”とすごい音がしました。その瞬間

「痛ええ！」

と叫ぶ少年。その目の前にはこの国の王様ガデイン王が眉を尖らせて立っていました。

「いい加減にせんかバカ者が！それでも我が王の息子がドリー！」

そう、この少年こそこの物語の主人公の王子のドリーだったのです。

## 第1話 旅のはじまり

城へ連れ戻された王子ドリーは父であるガデインに相当怒られ腹を立てて自分の部屋へと戻っていきました。

部屋へ戻ったドリーは

「なんで外へ出て他の子供達と一緒に遊んだりしたらいけないんだよ…」

と涙を浮かべ泣きました。      と、そこへ執事のセバスチャンが来ました。

「王子、私とお話しませんか」

と王子を気遣って来てくれたのです。セバスチャンはいつもドリーが王に怒られた後に部屋にこっそり来てドリーの話聞き慰めてくれるのです。

「僕はなんでこの国の王子として生まれてきたんだろう…もうこんな不自由な生活はイヤだよ…」

と、ドリーはセバスチャンに愚痴をこぼしました。      それを聞いたセバスチャンは

「そんな風に思わないでください。ドリー様が王子でなければ私はドリー様とも出会えなかったのですよ。それだしガデイン様だってドリー様を心配して叱ってくれてるのです。ガデイン様の気持ちも少し解ってあげられたらどうでしょう」

と、優しくとも厳しい言葉をドリーに言い部屋を後にしました。

ドリーは無言のまま下を向いたままでした。

やがて夜がきてドリーは不思議な夢を見ました。

『お願い！早く争いを止めて！でなければ人間界は滅んでしま  
うわ！』

“ガバツ”とドリーは夢から覚めベッドから起きました。

「なんなんだ今の夢は…」

ドリーは流れ出る汗を手の甲で拭き沈黙が続きました。

少し時間経ちやつと落ち着いたドリーはベランダへ出て風にあたりに行きました。

ベランダへ出たドリーは上を見上げ真ん丸い月を眺めていると、月の方からパンドラ・ゲイトの南に位置する“ルナティック・スクエア”という森に1本の光が流れ星のように落ちていったのです。それを見たドリーは悩む暇もなく駆け出していました。

城を門番や見張りの者に見つかからないように抜けて行き、パンドラ・ゲイトを抜けルナティック・スクエアの入り口に辿り着いた頃には息が切れていました。森の入り口は昼間は明るい為そこまで恐くはないが、夜になると誰でも身震いがする程暗く、闇へ吸い込まれそうになる。

ドリーは足がガクガク震え今度は冷や汗が出てきた。しかし、決心をして一歩踏み出した時、後ろから

「武器も何も持たんでその森へ入ろうとは命知らずですのう、ドリー王子」

ドリーはビックリしてすぐさま振り返った。そこには黒いマントを全身に覆ったおじいさんがいました。

「武器を持たずその森へ入る事は死を意味しますぞ」と、続けてそのおじいさんは言いました。ドリーは

「でも行かなきゃいけない気がするんだ！」と、おじいさんに向かってそう言い放ちました。

すると、おじいさんは右の口角を上げニヤつとしました。

「では、これをあなたに差し上げましょう。」

と、黒いマントの中から少し錆付いた剣を出し、ドリーに差し出したのです。

ドリーはその剣を手にとると軽く素振りを始めました。

「どうじゃボロいが、軽くて振りやすい剣じゃろ」

おじいさんは言いました。ドリーは

「うん。剣の事はあまり知らないけど使い易いよ」 「それでは気を付けて行くんじゃよ」

と、おじいさんは言い残し去って行きました。

「ありがとー！おじいさあーん！」

ドリーはそう叫び森へと入って行きました。

## 第2話 出会い

ルナティック・スクエアに入ったドリーは、腰には謎？のおじいさんから貰った錆びた剣を腰に巻き、少し頼もしくも見えました。しかし、実際ドリーは心臓が今にも破裂してしまいそうなくらいバクバク高鳴っていたのです。

それもそのはず、なんせ森の中は悪夢の様に真っ暗なのだから、でも、それに反してドキドキしている部分もありました。ドリーはいつもガデインの言う事を聞きパンドラ・ゲイトまでしか外に出た事がなかったからです。そんなドリーはこの後どうなってしまうのでしょうか。

と、ドリーが森を警戒しながら歩いているとどこかで“ガサツ”という音がしました。でも周りは真っ暗なのでどこから音がしたのか全然分かりませんでした。

ドリーは心の中で祈っていました。『どうか犬か猫、それ以下ならなんでも良い』と、その瞬間予想外にも目の前から金色に輝く狼が現われたのです。

ドリーはその恐ろしくも美しい狼に驚き動けなくなってしまいました。その時

「おぬしは正義か悪か」

とドリーに向かって金色の狼は喋ったのです。

「正義…悪…」

ドリーが小声で聞き返すと狼は

「そうだ。おぬしは正義なのか悪なのか答えろ」

と、ドリーは少し考え

「俺は正義ではないかもしれない。でも誓って言える事は決して悪じゃない」

そう狼に言った。

「そつか、なら良かった。どちらでもない、もしくはわからないと

答えていたのならはその首飛んでいたぞ」

少し笑いながら狼がドリーに近づいてきた。しかし、ドリーは逃げようともせず近づいてくる狼に自ら近づいて行っただのです。

狼は歩くのをやめドリーも歩くのをやめた時

「わたしの名は“ソナタ”だ。おぬしの名は」と、狼がドリーに聞くと

「俺の名前はドリーだ」

ドリーがそう名乗ると狼は一瞬驚いたような仕草を見せ

「ドリーか… 良い名だ」

そういうと続けて

「いきなりでなんだが一つ良いかドリー。おぬしは今夜不思議な夢を見なかったか」

ドリーは

「そういえば女の人が俺に助けを求めてる夢というか声を聞いたかな」

そうソナタに言うソナタは

「この国が危険だと言われたであろう。まさにその通りなのだ」

ドリーはそれを聞いてびっくりしたのである。

「なんでソナタが俺の見た夢の話を知ってるの」

ドリーはソナタに聞いた。ソナタは

「では話してやろう」

そう言うソナタはゆっくり話始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9452a/>

---

Wolf & Raven

第1部 エンチャントッド・ランドの危機

2010年10月14日13時48分発行